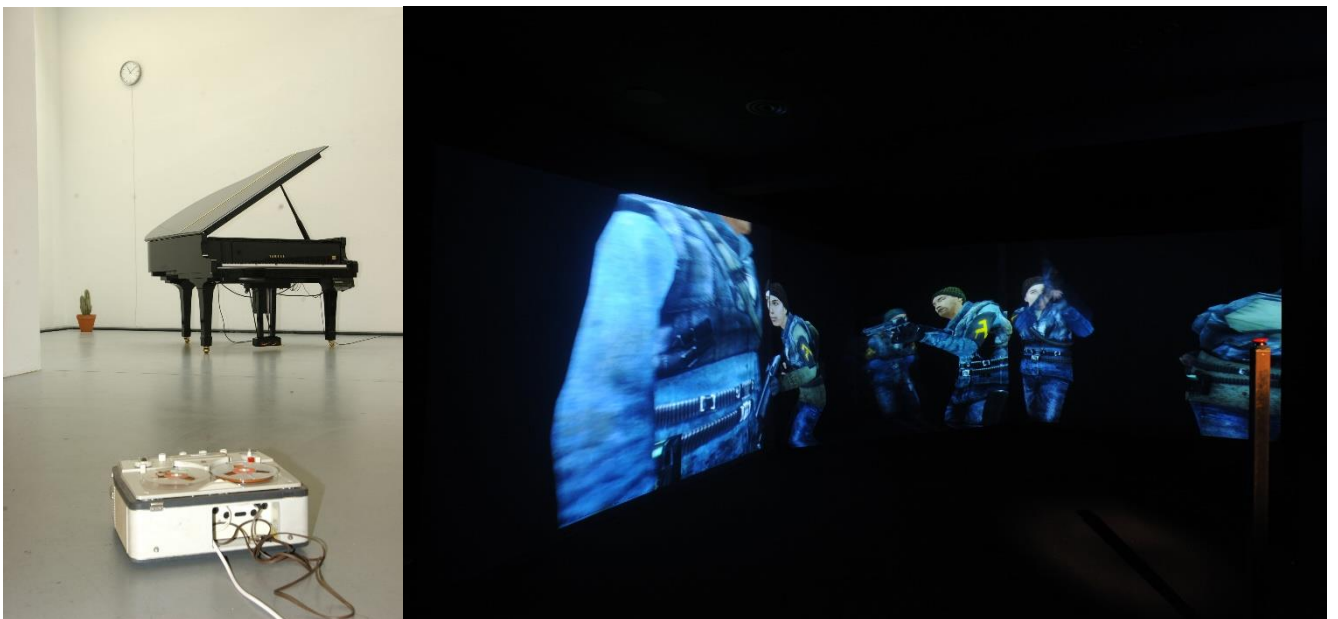


エキソニモ UN-DEAD-LINK アン・デッド・リンク

インターネットアートへの再接続

exonemo: UN-DEAD-LINK; Reconnecting with Internet Art

2020年8月18日（火）—10月11日（日）



《UN-DEAD-LINK》2008年 [参考図版] , (左) photo: Stefan Holenstein, courtesy of [plug.in], Basel

展覧会概要

東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団では、Tokyo Tokyo FESTIVAL の一環として、「エキソニモ UN-DEAD-LINK アン・デッド・リンク」展を実施いたします。

インターネットが一般に普及し始めた1990年代から、いち早くインターネットそのものを素材として扱い、ユーモアのある切り口と新しい視点を備えた作品でインターネットアート、メディアアートを軸に、アートの領域を拡張してきたエキソニモ。エキソニモは、現在ニューヨークを拠点として活動する千房けん輔と赤岩やえによるアート・ユニットで、デジタルとアナログ、ネットワーク世界と実世界を柔軟に横断しながら、実験的なプロジェクトを数多く手がけてきました。本展では、24年間に及ぶその多彩な活動を、初期のインターネットアートから本展で初公開される新作《UN-DEAD-LINK 2020》を含む近年の大型インスタレーションまでの作品群によって構成し、展覧会会場とインターネット上の会場を連動させ、エキソニモの全活動の軌跡に迫ります。

本展のみどころ

世界初！エキソニモの大規模回顧展

エキソニモは、日本でインターネット*が一般化され始めた 1996 年に活動を開始し、時代や技術の変遷とともに表現の媒体を変えながら、言葉、メディア、物質をユーモアと批評性をもって結び付けた、様々な方法で多数の作品やプロジェクトを発表してきました。本展は、当館収蔵作品を含む、エキソニモの貴重な初期作から本展初公開となる新作まで、彼らの活動の全貌を展覧会会場の実作品と記録映像、およびインターネット会場で公開される活動年表により一望する、世界初の大規模回顧展です。

*「コンピューターどうしを網の目のようにつなぐもの」を意味する。1940 年代より軍事目的で開発されたことに起源をもつ。1990 代半ばより一般化し、2020 年では全世界人口の約過半数、日本国内では国民の約 8 割超の普及率を占める。

エキソニモの原点「インターネットアート」*への再接続

2020 年現在、新型コロナウイルス感染症の世界的大流行（パンデミック）の影響を受けて、これまで以上にインターネットを介したコミュニケーションが活発化しています。また、エキソニモ自身もパンデミックに直面したことにより「インターネットアート」の重要性が再浮上したといえます。本展は、彼らの原点となった「インターネットアート」を起点に、エキソニモの 24 年間に及ぶ活動を振り返ります。

本展は、エキソニモの作品を介してメディアの歴史のみならず、今日的な表現のあり方や、人やモノとのつながり方の未来への新たな可能性を見出す契機となることでしょう。

*1990 年代にインターネットの一般化にともない誕生した、「インターネットアート」は、インターネットを主要な媒体とする芸術および文化的創作活動。技術や社会の構造を露わにするような批評性を特徴とする、90 年代のムーブメントのひとつ。

オンラインとリアルが連動する、新感覚の鑑賞体験



（参考図版）地下 1 階展示室展示イメージ／インターネット会場イメージ

本展は、「インターネット会場」と「展示室（地下 1 階展示室と 2 階ロビー）」の 2 会場で構成されます。他に例を見ない実験的な展示構成によって、エキソニモの作品世界を堪能できる展覧会です。

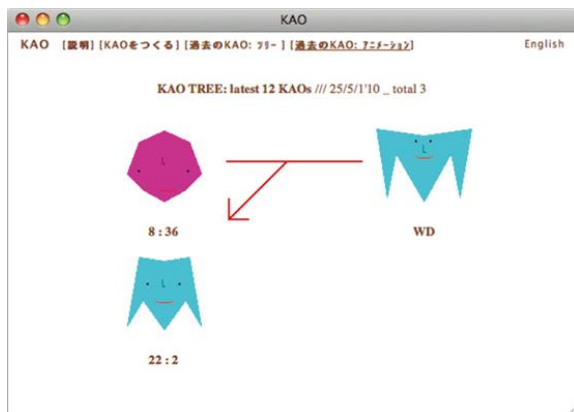
ウェブ上に構築するインターネット会場では、作家自身が、本展のために作成した

年表を元に、作家による全作品解説や、作品の背景を理解するためのさまざまなキーワードなどが、パソコンやスマートフォンから、オンライン上で鑑賞できます。実会場となる地下 1 階展示室には、作品と呼应するように解説情報が網目状に配され、実験的な展示空間が広がり、インターネット会場との連動感をリアルタイムで体感する、新感覚の鑑賞体験をお楽しみいただけます。さらに、2 階ロビーでは、特別展示を行います。（インターネット会場 <https://topmuseum.jp/un-dead-link>）

出品点数 全 20 点

主な出品作品

初期インターネットアート作品



《KAO》 1996 年

エキソニモがインターネットを用いて初めて制作したインタラクティブな作品。ウェブ上で、福笑いのように顔のパーツを配置して送信すると、すでに作られた顔と混ざって、それぞれの特徴を引き継いだ「子供」の顔が生まれる。



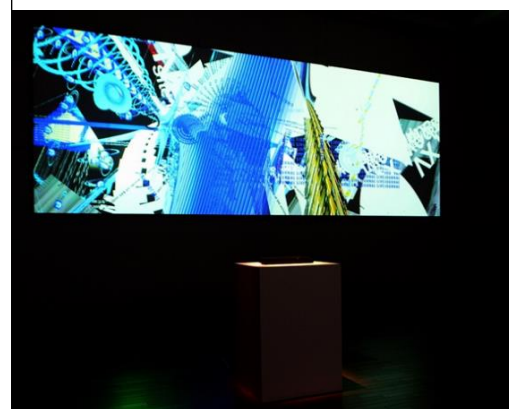
《DISCODER》 1999 年

あるウェブページに、キーボードから入力した文字を侵入させることで、HTML*のコード／規則に矛盾を生じさせるアプリケーション作品。キーボードを操作すると、ウェブ上のプログラムに矛盾と混乱、バグ（コンピュータ上のエラー）が発生し、ウェブページ自体が変化し崩れていく。インストール版を記録映像で展示する。

*ウェブページを表現するために用いられるコンピュータ言語

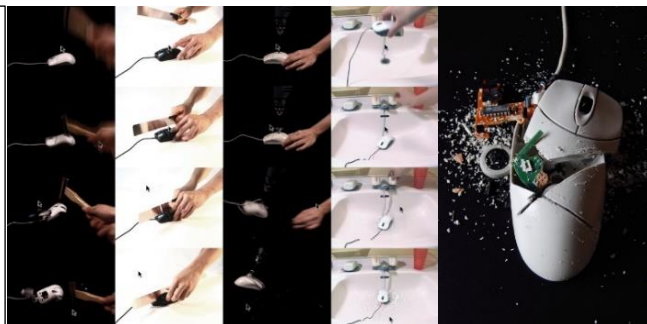
《Frag Mental Storm》 2007 年

ユーザーの入力したキーワードをもとにインターネット検索を行い、ウェブ上で見つかったサイトの画像やテキストをリアルタイムに無作為に表示していくソフトウェア作品。目まぐるしく切り替わる画面と、検索の偶然性が楽しめる作品。作品のタイトルには、「Fragment（断片）」「Mental（精神の）」「Storm（嵐）」という言葉が含まれ、人々の脳裏に浮かんだキーワードが検索されることで、ウェブ上に広がった世界中のデータから、断片が集められ嵐のように交差するという意味が込められている。



《断末魔ウス》 2007 年

マウスを破壊する記録映像と、その時のデスクトップ上のカーソルの動きを記録したソフトウェア作品。作品を起動すると、マウスが破壊される映像と一緒にデスクトップ上の自分のマウス・カーソルが、実際に壊された時の動きを再現する。鑑賞者は、自らのカーソルによってマウスが破壊される疑似体験ができる。データの記録でしかないカーソルの動きは、マウスを動かす人間の軌跡を想起させる。コンピュータの身体性に迫るエキソニモの代表作。

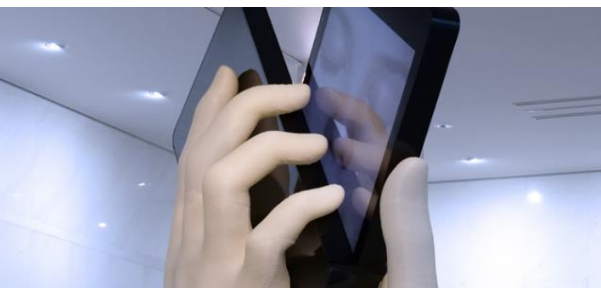


《Fireplace》 2014 年

マウスやキーボードを、暖炉の中で燃やす様子を撮影した映像作品。火は人間の文明の起源であり、火を囲む暖炉は、かつて家の中心に据えられてきた。かつてリビングにあった暖炉は、時代とともにテレビに取って代わられた。今や現代の暖炉は、個人のスマートフォンの中にある。

《HEAVY BODY PAINT》 2016 年

ビデオ映像が再生される液晶モニターに、直接絵具がペイントされている。液晶モニターには、絵具のボトルの映像が映し出されており、その周囲はそのボトルの絵具の色で塗りつぶされている。固まった絵具のテクスチャとは対照的に、手持ちカメラの揺れによって、映像がかすかに震え、立体的な視覚効果を生み出している。



《The Kiss》 2020 年 あいちトリエンナーレ 2019 委嘱作品

巨大な手の彫刻に掲げられた、スマートフォンのような二つのスクリーンに顔が映し出されている。まるでキスをしているかのように重ね合わされている二つの顔は、実際にはただ目を閉じて個別に撮影された二つの顔の映像である。社会主義の巨大彫刻を連想させながらも、本作に象徴されるメッセージ性は不確かであり、それによってむしろ正解を見出すことが容易ではない現代性が浮き彫りにされている。

特別展示（2階ロビー）

オンライン・インスタレーション

※地下1階展示室、インターネット会場の両会場で体験できる作品

《UN-DEAD-LINK 2020》2020 年

世界初公開

協力：坂本龍一／株式会社キャブ／

株式会社ヤマハミュージックジャパン

[参考図版] 《UN-DEAD-LINK》2008 年

左) photo: Stefan Holenstein, courtesy of [plug.in], Basel



シューティングゲームで敵を撃つと、グランドピアノが鳴り、3D のゲーム空間と現実のオブジェが連動する作品。新作となる《UN-DEAD-LINK 2020》は、新型コロナウイルスによって毎日のように感染者数や死亡者数がメディアで伝えられながらも、その事実を実感として捉えることができない現状から生み出された。

身近な人が亡くなるのは、物凄くショッキングな出来事だけど、遠くの場所にいる人の死が、ただの数字になって、何十人何百人死にましたとなると、全くリアリティが感じられない。そのギャップが気になって、ゲーム空間の中で死ぬこと、現実空間の中それに反応することを再現しました。

(エキソニモインタビューより抜粋)

《Realm》2020

HeK_Basel (バーゼル、スイス) 委嘱作品

機材協力：キャノンマーケティングジャパン株式会社

「領域」を意味する《Realm》は、スマートフォンとウェブブラウザの二つの方法で接続できるオンライン作品である。見えない風景、美しい墓場の写真群のイメージは、二つの全く異なったものが共存している環境を示唆している。



…エキソニモの活動は、結果的には「インターネットアート」の黎明期のアーティストたちが語っていた 20 世紀最後の前衛のレガシーをインディペンデントに、実践的に継続しているのかもしれない。そして同時に、このようなエキソニモの脱領域的活動を紹介することが、芸術作品の体験を考える上でも、またどのように「生きたアーカイヴ」を保存していくかという意味でも、新たな美術館の在り方を考える契機になっていくだろう。

田坂博子（本展ガイドブック「エキソニモとインターネットとアートの前衛」）より一部抜粋

本展は諸般の事情により内容を変更する場合があります。最新情報は当館ホームページをご確認ください。

エキソニモ exonemo

1996 年に結成された千房けん輔と赤岩やえによる日本のアート・ユニット。2006 年、世界最大のメディアアート・フェスティバル「アルスエレクトロニカ」において《The Road Movie》がゴールデン・ニカ（大賞）を受賞。近年の主な展覧会に、「あいちトリエンナーレ 2019」愛知芸術文化センター（名古屋、2019 年）「SUNRISE/SUNSET Artport」Whitney Museum website（ニューヨーク、2019 年）、「ハロー・ワールド：ポスト・ヒューマン時代に向けて」水戸芸術館（茨城、2018 年）、「メディアアートの輪廻転生」山口情報芸術センター[YCAM]（山口、2018 年）、「エキソニモの「猿へ」」三菱地所アルティウム（福岡、2013 年）など。2015 年よりニューヨークを拠点に活動。<http://exonemo.com>



《Signature, 2020》 2020

本展ガイドブック

出品作品図版、作家インタビュー、田坂博子（東京都写真美術館学芸員、展覧会担当）による展覧会解説、主な展覧会歴を掲載。ミュージアム・ショップ NADiff BAITEN またはオンラインショップで販売
デザイン：水戸部功

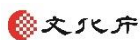
価格：未定、発行：東京都写真美術館

開催概要

展覧会名[和] エキソニモ UN-DEAD-LINK アン・デッド・リンク インターネットアートへの再接続

展覧会名[英] exonemo: UN-DEAD-LINK; Reconnecting with Internet Art

主催 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館、日本経済新聞社

助成 令和2年度文化庁メディア芸術アーカイブ推進支援事業 

会期 2020年8月18日（火）—10月11日（日）48日間

開館時間 10:00-18:00（入館は閉館30分前まで）

休館日 毎週月曜日（9月21日、22日は開館、9月23日は休館）

観覧料 一般 700円／大学・専門学校生 560円／中高生・65歳以上 350円

小学生以下および都内在住・在学の中学生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料

会場 東京都写真美術館 地下1階展示室、2階ロビー

インターネット会場 <https://topmuseum.jp/un-dead-link>

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

電話 03-3280-0099 www.topmuseum.jp

インターネット会場はこちら



このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。広報担当までご連絡ください。

- ・図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。
- ・図版の無断掲載はご遠慮ください。また、トリミング、文字掛け等の加工はできません。

東京都写真美術館

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

電話 03-3280-0034 / FAX 03-3280-0033 / www.topmuseum.jp

展覧会担当 田坂 博子 h.tasaka@topmuseum.jp

広報担当 平澤 綾乃 池田 良子 岡田なつき press-info@topmuseum.jp